かわらばん

センパイ事例に学ぼう！

10月5日。薄雲りの水曜日。南飛騨総合健康アリーナ（仮称）ワークショップの2回めは「お出かけ見学会」でした。参加者は、事務局スタッフもあわせて26名。みんなでマイクロバスに乗って公共ホールや体育館など…今回の建物づくりに参考になりそうな施設を訪ねました。

最初は「可児市文化創造センター」。ここも構想・設計段階から市民参加でつくられ、運営でもNPO団体「アーラクルーズ」の市民スタッフが活躍しています。桑谷館長からの「プチ講座（ホール編）」は、参考になる素敵なアドバイスがいっぱいでした。

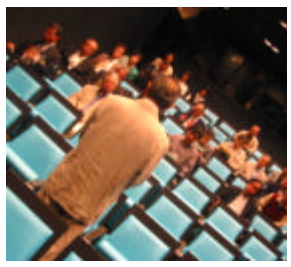
つぎは、「扶桑文化会館」。館長さんからお話を伺い、見学させていただきました。

最後は、小牧市スポーツ公園総合体育館「パークアリーナ小牧」。大・小のアリーナにトレーニング棟も付属した施設です。プロポーザル審査委員長の曽田先生（愛工大教授）も、駆けつけてくださいました。

施設見学も参考になりましたが、それ以上に、ランチや何気ないおしゃべりなど…参加者がいっしょに過ごし、なかよしになって「笑顔」のこぼれる一日となりました！

WS2
「お出かけ見学会～類似施設を見に行こう！」

プチ講座（ホール編）



▼市民といっしょにつくるホール

劇場は鑑賞するだけではなく、ものを「つくる」場所でもあります。から最近の公立ホールの名称には「創造」や「芸術」などの語がつくようになってきています。公立ホールは、40年前から徐々にそのあり方・たたずまいが変わってきました。とくに、「市民といっしょにつくる」というのは新しいやり方。10年ほど前にはあまりありませんでした。あったとしても、そういうこと・参加のしかた」ができたらいいなという程度。

今は、その市民がボランティアさんたちが支えてくれる＝市民パトロンのような存在。スポンサーでもあるわけです。かたちをつくるところから参加し、館ができたあかつきには、運営にも経営にも参加され、将来にわたって核（下呂市民のリーダー）としてがんばっていただければ、きっと市民のみなさんにも喜んでいただける施設になることでしょう。

▼秘訣は「三角関係」を大切にすること？

「市民」「行政」「専門家」の三者の関係をぜひ大切にしてください。かつてホールは「行政」だけでつくってきた。次に「行政」と「専門家」だけで。そして、今は「市民」とともに…。それぞれ「点」のような存在ですが、三者が結ばれ、「点」が「面」になれば倒れません。

市民のあり方も変わってきています。これまでの市民は…私の誤解もあるのかも知れませんが、陳情など多分に「要望・要求・批判型」だったように感じています。でも、これからは「提案型」になってほしいのです。ただ、批判するだけでなく対案を出す。権利主張するのもいいですが、しっかり義務も果たすということです。

この三角関係、男女の場合は危険な場合もありますが（笑）、悪いほうにはいかないのでぜひ意識して大切にしてください。

▼「おもしろがる」ことが「継続」につながる

市民の方も最初は元気よく関われるのですが、長い時間のあいだにそれぞれの事情や温度差もあって関わり方が変わってきます。そこで、お願いなのですが、ぜひ「おもしろがって」「たのしくやっていただく」こと。この「おもしろがる」ことが「継続」につながると思います。

▼やってきたからこそわかる「逆転の発想」

劇場の運営について、4年間やってきて、1000席のホールが年間何日使われていて何人に使われているのか？正直…それほど多くはありません。とかく、「税金」「光熱費」「人件費」とクレームの対象になりやすい。でも、「使う」「オープンする」だけではなく、1ヶ月の中で使われていない15日間をどう活用していくか？そういった「逆転の発想」も大事です。これは4年やってきて思えるようになったこと。

例えば、先ほど見ていただいた主劇場のホワイエの仕切りは回転していましたね。公演のないとき閉鎖すると、シャッター通りのようになる。つまり閉まったガラス扉を見て「ああ今日も使われていないな、人が来ていないな」となる。そうではなく、使われない時もオープンにして市民が回遊するコーナーとして提供すればいい。

▼専門家を「信頼」したうえで「さらなる議論を…」

そういう意味でも、専門家をどこまで信用するか？批判するのは簡単ですが、うまくいかない場合には何か原因があるのです。専門家のせいだけではない。ぜひ、専門家を信頼した上での議論をしてほしいと思います。

▼「劇場」の中に「小劇場」を

可児市は人口10万人ですが1800席のホールが満席になる日は数えるほどしかありません。平均400～500人といったところです。演歌の場合は少し多くて、それでも800席ぐらいです。

ぼくが提案したいのは「小劇場」です。市民がピアノのおさらい会、カラオケ、講演会などができる大きさ。劇場の中に小劇場をつくる」わけです。舞台上だけで200～300席というのもあるでしょうし、ここのロフトのような練習場でも公演ができれば市民の人に喜ばれることでしょう。

▼もうひとつの劇場「アリーナ」

つぎに、アリーナですが、「アリーナの劇場化」＝もうひとつの劇場にしたらどうでしょうか？スポーツの専門家から見れば邪道と言われそうですが（笑）。さだまさし、井上陽水、ユーミンなども体育館型の公演をやっています。そうすれば、大勢の集客も可能になるかな…と思います。

▼劇場は広場だ！

まずは、賑わいを出さなければなりません。そういう点ではプロポーザルの当選案は非常に魅力的です。広場のように目的もなしにふらっと立ち寄れることが出発点です。可児は、4年間やってきて入場者数も20万人以上と増えてきている。親子で恋人でほんとにぶらりとやって来られる。彼らが将来の観客になるのです。私が提唱する「劇場は広場だ」という理論はその辺りに立脚しています。

▼さいごに～下呂のみなさんへ

目の前の木を植えることも大切ですが、将来の「森づくり」を夢見ながら。文化芸術は、あせらず遠目で見ることも大切です。下呂のみなさん、ぜひ、そんな劇場にしてください。期待しています。本日はありがとうございました。

桑谷　哲男（くわやてつお）さん

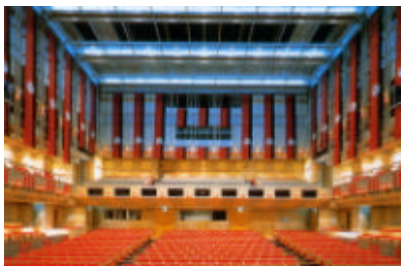
日本大学芸術学部演劇学科卒業。96年、世田谷パブリックシアター技術課長に就任。92年1月、可児市文化創造センター館長に就任。早稲田大学非常勤講師、劇場アドバイザー、コーディネーターなどの仕事のかたわら、国内外で照明デザイナーとしても活躍中。

① 可児市文化創造センター

大ホール　1,019席
小ホール　315席
延床面積＝約18,400㎡

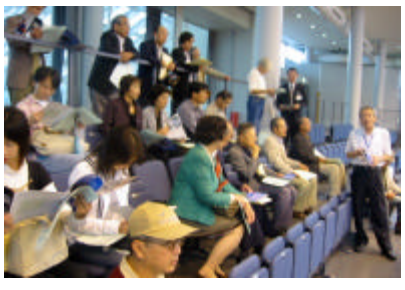
② 扶桑文化会館

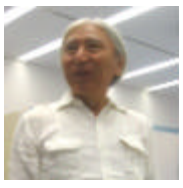
ホール　746席
延床面積＝約3,200㎡



③ パークアリーナ小牧

メインアリーナ　2,600㎡（6千人）
サブアリーナ　1,400㎡
延床面積＝約16,700㎡





ひとことアンケート

見学して参考になった／入ってすぐ元気があるかないかって感じれる／特徴を持った施設が成果を挙げている／可児のように300くらいの小ホールがあれば／小牧のサブアリーナぐらいでいい／みんなのヤル気が大切／やはり、三角関係（市民、行政、専門家）の重要さ／提案型で参加する／大人数のイベントはアリーナで行うことも一考／小コーナー、喫茶食事処等身近に利用できる魅力ある施設を散在／下呂の特性・郷土文化を活用する／行動することはいいですね。人にも会えるし違う思いも知れるし、よかった／早期に文化ボランティア組織を立ち上げたら 他

次回予告

第3回　南飛騨総合健康アリーナ（仮称）ワークショップ

WS3「シキチタンケン＆つむごう！居場所の物語」

～敷地を体感し、各部の空間・利用イメージを検討しましょう！

10月15日（水）午後1:30～4:30（予定）
下呂観光会館　にて

あなたもわたしたちといっしょに下呂の元気（＝まめ）の「タネ」を撒いてみませんか？
やがて大きな花を咲かせることを夢見て…。
お待ちしてます！

＜発　行＞
下呂市役所　都市建設部 建設課　まちづくり推進室
＜編集協力＞
㈱日本設計　デザイン・コーディネートチーム
＜お問い合わせ／事務局＞
TEL 0576-52-2000（内線214）　FAX 0576-52-3676
E-mail:satoshi-km@city.gero.lg.jp